夢想兵衛胡蝶物語後編

参

夢想兵衛胡蝶物語後編巻之三

東都　曲亭馬琴戯編

哀傷郷

哀傷ハ徳の害ありとそ。されりて。関雎ハ哀をそ傷らびよとの人情既ニ情あり。人ニ情あるときハ又哀傷ありといへども。むし杞梁が妻のごく哭く。城崩ニ城陥り。処女が哭声天ニ通じて。當電下ニ聚ろうとなり。至誠の抵ところ。申包胥ハ七日哭て秦王終ニ楚を救ひ。烏戝津使主も七日哭て衣通姫を誘引ぬ現やうく哭りのも時ニ當て一善のかゝれバとそ功もあるうの雍門子が哭上手。又楠公の跡哭夫今ハ至て稀せり。さるバ梟子と持統天皇ハぬりのとく歌骨牌の倶盧ろうもあるべうらバ哭て娯ニ乏夜もあるバ笑ふく強顔さと。高尾がいへんうまて

涙よそう笑ひぞろく油断のならぬが浮世楽しく盡さず哀しく去て飲び来る飲べのを飲べ良とさするぜ。呂飲つぶれ哀よぞ。静よ天理よさぐりの神仙とも。老佛とも。馬鹿とも。利根とものろのろ。そもく哀傷といふ風か人ぞ多るよりひさぐて哀む紙かて生平とさるべ。五月雨の簷下痲病患の棚口ざらうくと湘落して暮ぬ日もあふれば注良るを美人と稱し。愁眉を上品と定め。府映を愛ら〔ぐう。壁口かくを娯ーぐるも多赤子の啼声を学く傘の長い経いとこひ。幼少ろ子ぞもらよ鶯古さて実とのを習へるから。衣類の膝ろ袖が影ま」彼ろもあくぬ血涙よ手拭を出ーろ〳〵入まろ出ろういそがし。朝の板敷炎天ふ額の汗を拭ふ〳〵些主おぐさ女中るんとふ枚原上田の鼻紙も拭ふ涙で毎日く。十帖あるろ費とあり。隣の女児が実鶯古哉ても。

あの子の声へろくさど情いとあへんとろがひるのとて評とる。寒三十日のるきころ実復ひ。十九土用の砂糖湯も。皆ろく実声立てふ為。かしこ風もある。の教。ろまを怪むりのいるのけど。爰お兵衛ハ紙老鴎の花びよ。ま」ーろいでも。ホこの國へ巣をうえつ。ろようけ。咲くようけ。直と呆てろぐろ。何へふも詩へふも。人さへまが目水てれおひろれば忽地よ。ろと実出ーて止所をろれば一言まりの問答もるべ。こへ何もろよかくのぐ。年中実て暮とろへ凡ろ風俗の性そて事ま觸くろろろへて。物るろひろこそもるろう。ぶそ春の門松を。冥土の旅の一里塚とまく哀ーぐ。四方山よろ八重霞ハ定めるれ秋の雪と変う。易きをろひ。咲も採ハ灰。為樹の花も。年散とれの学者を観ぐ。夏ろゆへべの蚊遣火ハ茶毘の煙と世を果敢ら山の狭外る秋の月終の友とく

西を願ひ。冬籠もる庭の雪八人の命の消易さよ。ひとこと。會者定離と悟りてハ豹よ春来る。乙鳥も。居ずむ狂ハ可笑けれど。秋の別れが悲しいとく。門を向上くりのもり。ひ。哀別離苦と悟りてハ。天飛び秋の初雁も。後先ろ世のならひいづれ弥よ入りやする。いづれ書ふ捨ようこと。ぞひやうざる涙の種。彼れの嫁入り。これの婚ぎ。ヤレめでたいよりめでたいの。新婦が姑よりハ。妻の間柱の翠の墨繋も。尾花が末の白髪と。妻ど。玉を敷く容顔も。法帖のやうふなうと。速く。それが齢よ。之くらで芸向繋のうれがぞひ。諦らこもあるん。老少不定が世のならひ。亭主が経命でも。門義が夫折るされても。いづれ二方缺ねばならぬひとのならうとそのとの気の妻さ。今それぞひ。長いと。婚姻の真最中。夫て媒妁。実女郎。舅姑。内兄弟。さら。親族。縁者。長屋中。大約その中よりの。大声あげて実ぬハ。かくてぞ夫婦睦く。私ひよ原ひ岩田帯と共よ。思ひ。ち。を結び。産ハ生死の境とく。十月が間実のし。又実幕くやうやく。嬢くる赤子の産声。オギヤアくをせめてく。高主。多紋。父酸鼻を生ずるりの。死るハ必定この子の命ハ長いから。終いとからもよねども。逆れ逆れ死孫がるべ。生まく紋ろく死ぬるを。ハ。かくまで哀いのうのとく。墜を没が産婦も共よ。呼喚あげく血。發く。上を下へとくせども。穏婆いろく。奥。今夜の御利の金一両正を。握うめて居さこころが。ぬくさ。これも且てる。若の命。令が欲さの血塗ま。抜も。死ま。が物ろる置土産。何その令よ別やとる。さらでも。失い易く。ぞひやる私ろの。上おけそいうまぬ胸の中。消よ莫て役ろさべ。かれがを。ぞひやる私ろの。上おけそいうまぬ胸の中。消よ莫て役ろさべ。かれが

人の奴婢なんども。見るの目うら生ろうの涙雨と先へ喚し。拉と女祖
父が勧封面うら。後朝の涙を浜ざ人ろみ二度の膳よむろへ噎て頻
死のまや。せまの孜食傷へまや。せりの狄と。箸を取るうり胸ふさぐ。此
小子簡あるうのへ。奇働て夏植つけ。秋うら冬へ收る来の。秋うりとも
化のうへんや。農夫の子の膏で肥し。似て大菩薩今むざくとうが喝へ。
ろへ物体るくも。哀ーうござると。喋うの。食さうこうろへ沿せぜ。ま宅ひら
き破衣えでめろへ客も亭主も屑うち。鼻め。この年ホろうが分こ。
や。膳緒へ成就さられど。彩造やとてのおろうふ。祝。帰。辞。馬の難
あろへ。忽地烏有とろうねぐ。よさろうくとも百年と。蠢わざる家へあう
ど。泥て衣彩へろう友よ。ま且めもろえ。財且もる。非如家なが住荒さ代
衣お。雑具へ持ろさざと。聖もまま且ぬへ命え。家庫が先へ残る秋亭主
の命が先へ渇る秋とそもかくてもこの世へ假宅。造化の備屋今さらう。
ろとその日をひま且べ。奈何哀うあるまいろの。犯ら。道理至極く
結構る家造りも。不如高ろの且べ他人の有。又その人も一生陋住む
工ゆう住ろ。阿房の餘煙も。三月崗岳残まで田園一る果へ
浅茅が草荘く虫の声だろや残るらん。虫の声だろや残るらんと皇
ふつまろ小謡を般よ。ものく愁ひ声。馳走の膳も咽喉へ入べ。まろる
学帚と観るも。一宿の起りも。水盃で遺言。明日やで後う
ぬりのと。ひ定めて妻も子も。影膳居ざ泣くく。年弱どちの。三情も。
めへをろれのそでのと哀と。子ども開浄も生さ死をひるも。犯うら
哭生い又富りのへ富まふ。子孫相続の後ろよ。財の蝋ろんと哀ーと。
負ー死のへ負ー死まよ。ちへぬ不義理の生涯ぬ先まで死ろへと。

哀めど人の迷ふ物をば拾へど迷ひ一人を胸うさや。辛かんかく
あらんとて。化の皮痛を疱瘡を洩でゆれそぐるされば貴きも賤き
も。賢きも不肖なるも。老弱男女もしるべて。常を記せぬりのうけと
べ。物争ひをさるエるく。風と盗賊こそてる。只同病を相憐む実情を
りて交ま。べきもふぬも。釈迦も。疎きもとくて憑りく世界よ捨
るる風なれど。惜しエふ喜しエも腹のふエをもまゝべ。良賤貴
居るりの如く。歌曲を奇ハど。絃管鳴ゝさべ。獣水狂山よ生るりのなく。
明くも暮くも佛三昧口を啓く笑ふりの。終く一人もあゝざれば。物そる
裏ふもらく。人気和せど。病ありのねりのもりけまで動もされば諸気
労咳こう虫。おのづら経命るり。夢想兵法こまゝの取勢を
おで。ま七記でハ経命るりもエりゝ。説喩さやゝと。度ゝ。ど人そる
うめく。弦べ夕立の晴間おろよく。哭止人もなと。索まども。彼首の隅でゝ。
うと哭さ。芒首の隅でハ滅噫ゝと。哭ゝまてそり逆上ぜうらくふ
お賜ふもゝ。うつく鳴の死顔を。蜂の巣こる如くるまべ。これも苦虫
吹潰こて。苦よ哭生ゝこゝ気持。かゝる亦よ長居ぜバ哭殺されもそだに。
足のとのおゝいうち。尻よ帆うけて走るふもべと。疾川をうち渡う。彼腸を
こう田越こて。胸板の驛路こう。悲歎坂へさかう。苛南志山ある菩日寺
ふ衛て。那瑠の南弥陀を拝こう。彼ともあくね神ぐ浦の浦のえるめも
酸鼻生湾。難死湾。錄るんどの魚の浪こうち揚らまこるもあくまこよ
もべそこる物毎よ気も滅入まバ只直さうふさうう。ろくて。悲野

といふ。郊原みぞ生ふる。この処ハ墓所ならむ。古墳草ふ埋もれて。白楊高く風ふ靡き。有馬皇子が磐白松ハ今も偃まずあらんとぞ。

真間の手児名の墳墓ハ。紅淚楓と深めど。佐鞆ふ触ふる覇王樹妻く。槍擲とるりんおれりくの檐の木山妻じく。巴峡ふ叫ぶ猿の声堂樹を抱き鹿の鳴いづまハあまごく葛の葉のうらんがへる吾狐蓼ふひくめる秋の蛩。垣ふ吻く冬くの蜂。誰よりぶ子ぞる。小夜千鳥。冥土の客ふ声うんとぞられら死出の山鴉。阿曽沼の鴛鴦も。哀慕の泥ふまでに栖む。蔓野の雉。夜の鶴もろ三重三の桐落葉すぐ寂滅を示し鳧鴈三西風吹き朝霜ふ没て感慨妻うやこうを鬼ふるとも。かく秋ふ声ふ化ふんとぞくバ流石の義士吾も引入るるふもおぼえて。

去らんとすれども足進まず。りのそくぐや呂顧ふ天うら仰ぎて低光

ざ睛を待バ人生憎ふわろく降りて学せそハ沢。草繁ふ聚く虫の声。いとどいぶせき入相の野寺の撞鼓胸ふ巻て呂難息するおもわれ一叢繁き尾花が袖のうれ辛抱くとんくまでのとういでおるめく薄が下ふ忽ち。白く髑ふる触髏あり。憐べいくむくの毒ふそぎ。雨ふおれて汚れ臭るぬーや誰ぞうそをおるめと。妻お岳湯ハ左ふ右ふ草繁をうて彼空髑髏ふうら野ひ没原来何れの人ぞ。才子美人のうれる果欲貪夫悪婆のうまう果欲生を貪り利を失ひて。事のこふなべる欲王候武将の国家を失ひ身を戦場ふ曝ぢるりの欲着約のして不孝不義の愧を妻子ふ遺せるりの欲世ふ捨らまて。餓死せーりの欲酒ふ溺まて。噸喊せーりの欲ふうそふ恐ひて。情死せ欲春秋あれ不足る。痩うる犬を肥さんとて死ーそこの野ふ損さーうる欲。こまを問ども答ふうく。こまを叩ども終ふ者ふ。

かゝるべきゝ又何をうらみん。さてあまどゞ屍風ハ敗るといへども。骨の存ぜざる骨今ゝの母霊あらバこゝが說どころを吟ぜん。此の國俗の性なり。哀傷ありて生平とするから。悲歎裏ゟ通りて大抵さるものゆゑバ。避逅この如く拉歷するバ既ゟ利害を說喩して悲ひを醒さんとやくとも。踈哭の声甚ゟ満て。こゞ言を聽ものゟ。ことばくそひーとをいわで止ぬ。腹のふくるゝ形ゟるゝバ。今ゟゝゟ沒ゟ統ゝく示さんよう說どころを聽ずよ。夫喜怒哀懼愛悪欲の七情ハ人の世の常ゟゝ生まゝく靜ゟるハ天乃性感じて動くハ性の慾ゟるゝよ七情發るハ怒ゟバ憤ゟバ喜バ樂ゟバひとゟ哀むりのへおよびいまゝこの人いるとゟゟ。哀ゟ死ハ死別ゟまゝをものゟ。物哀ゟ死も又慾ゟるゟ。かゝるゟゟよいゝく悲めゞゟ陰を破ゟふゝ飲べバ陽を破るようゟ死ハ喪ゟりのハ悼めゞゟ生ハ滅せずバあらぢ。彼経くその死を求ゟりのおろかと痛べきゟゞゟ。ゟゞゟを滅せずバあらぢ。彼経くその死を求ゟりのおろかと痛べき迷ひよおゞや。生死ハ昼夜ゟ異ゟるゞ生んとゟゞゟゞゟそのゟひゟの。死を憎めどもそのゟひゟの。只生る日ハ生を樂ゟ死る日ハ死を樂ひべ。吾生ゟゝ五尺の形あり。ゟゞ死ゝて一棺の土とゟる。只生ゟゝといふとゟゟ。物のおもよおゞゟゞ死ゝうといふとゟゟ。土の厚ゟおゞゟゞ生ゝて土とゟる。亦何ぞ哀むべき。孝子の祝を喪ふと死哭泣く声を惜ざるも。既ゟその喪除ゝて心ハ悲屑拔ゝく勢ゟ著。ゟゞゟてゟゟけそ礼節とゝいふ。むゟ」子夏が除喪の見糸ゟゞゟを弓へゟゞ將拆ゝそれゟ哉ぞ。

せぞ。喪ゟ病ゟると死ハ肉を辞せざるとゟゟ。喪とハ忌服肉ゟ腥ゟゞゟをその生を保ん為ゟの。世俗多くハ死の死ゟる。生の生ゟる所以を知ゞ。婦人の仁を仁とゝく。終ゝ君子の仁とゟゞ是を悲歎裏ゟ迫

哀をいますこし志すべきなり。先王礼を製りたまふ。これ敢てこさざるところなり。又子張が除喪の見まみえて琴を予うべき摂縹緲こえて歌ひ先王礼を制りたまへり敢至らざるところなり。子夏も子張も孔子の弟子なり。いづこに有がたき賢人の道ども。哀をもとめて礼をこさざる夫婦法の哀を斉斬の情鐘粥の食をる礼に礼より哀を又礼より哀をこひ求むるまことの物をまよひ泣のろく。哀ぐるうらう傷るへ情まおもてこと愚癡と彼狂人が物まねしく。終日哭と異るべき。故もこれ聖人へ時よ因て仕を安くせよ当つくその業と楽むれよ哀傷ひ私の形の主ぬそ。神へその宅のり形を労ーて已ざれば死るうら瞬さ。精を用ひて已ざれば竭るよりも速なり。只哀死を悲ましく。その情よこさねば悼きて命を隕すまで至らざる眼を病りのもの空よ薬を見天を憂うりのの蘊んこと懼ることの譬喩よひとつもいでものらふ驚死。哀ーまでりのる紙悼へこうみ先愚病の所為ことなりひ月よろこらず形へ始うりあるりのふおらべ又始うるの紀もおらべ。有ふもあらべ。まもおらぬこと名ひく人間とふり殤子を長寿とー彭祖で夭折ことも人の寿命へ限りあって天地の限りる死ふ及べ限りある命をもて限うるりのもろひ一年三百六十日周うら頓めそうち歌き。こと多うら命を縮へ愚ことふもおりあり。病へこうのるべとこう小人利と失へべこと哀こ士人へ名の為ふこと哀こ有司へ爵禄の為ふ哀むその歎き深しく。その哀を究るとれへ身をめてこと殉るー至れりこと多くも哀傷の妻くへ懲より生ざるをもと寡慾ふーて愛憐うるくへ愚癡の哀傷ありらんよ世俗ふの宝をもらべ只彼雀の子やとびへ龍の腮の珠なんどはるべ貨を貴びてふの宝を失ふの妻。

あのそうの
哀傷郷の
ふもと野

一の野をうもとと骨そこのみのきよ名

又憐べきことゝぞ。人おのく稱ことなれバ。まゞ壮のこゝろ。
年ふるとゝもいまゞ老後のこゝろ。なくぬあよ世もやゝく賢
も五十年。不肖なるも五十年。一生涯てことをあてそゝるゝ。その子の生
ことなくそのゝ死んはてゝ哀き春の木秋の花とゝゝ。ちりるん後ゝゝびあり。
東山ゝう生る月ゝゝ西へ入る終のゝゝ祝べきを祝ひ喜べきを喜ばざるハ。
悖ゝるゝ仰ぐる迷ひのり。憩ゝ明ゝゝバ等用ありぞゝれぞ一ハ二を生ゞ二ハ三
を生ゞ。三ゝう万物をゝゝれ天地ゝゝ父母ゝゝれとゝゝるり。萬物ゝれと兄弟
九寃也。乃復變而為一云云
るのゝ。ゝゞ身ハ天地と共ふ生ゞそゝその一ゝをいゝゝれ
ハ。ゝと言ゝ三ゝるるゝう又その言をいゝゝれハ三ゝるゞゝいゝゝる。ゝゝバ
ゝゝゝ

といひ捨て立ゆく後ふ見れば日はや暮なんとす。ひろ野の八月なれば草ふかく露をあつめて。衣の裾ぬらし。十町あまり走りゆけば。ふりくる松の下ふ。二八ばかりの美女年の長なる婢の袂を草草の露ふきはらひ。あとや玉の如き男の折ふし正しく殘さうなる義父孝感を迎へ。小腰を折め先生ちかづき懇ひの〳〵ふかく示され。救ひの道理ありと。傍ふとゝめ。伏ふ回答せんとて纔ふ。といひければ。笑顏滿面でおごそかの國ふ寄ー。と義父孝感ふ告ー。と。這奴ふ融解のだけしるらん。とゝど驚く事きわまる。徐ろふ歩ろう。少年いろ〳〵の議論あるりおのがひつとふ慎のぶちらりへ。笑ひ〳〵とのべ。ふたゝび莞爾とうち笑ひかの人迹絶しる野末おろそを跡ひんいと侵ひ。ふり向ふ遠くも仰ぐ卿の星き虫の声の外ふりのろ八重降の夜

ハ殊さらあけくそも月を燭ふかゝり明さを誘ふ〳〵とく来ふみべ。義孝孝感の外ふ人物ありとも見えず。風爐ふ炭を餝て形のごく釜をうけ。物の本二三巻ー。ちらりしる外ろ木椿ひとろありて反古ふ裂てをうけしる。定りても。ろの外物をべつで落葉ふ主て歩ー。る主風儀の生幡ふて月ハ草ふ歩く。新窓みさー入ふ虫ハ庭ふ聚さく。声寛を慰めー。且ハ少年のふ。卿ふ先生の高論をさく〳〵ふく。慷慨ふ堪ざる体ふて

ゝる先王ハ死生の変を説のゝしも死生の異るを云のゝみ。道家の訓を耳じめゝとも。礼節の圏圏を跳り出るゝ事ハさるゝ様ニて某ハ示さるゝ所ろ
生る人の上ゝ死ゝ其ゝ更ゝそめゝと云。夫死るりの人上ゝ主君るゝ。下ゝ臣僕るゝ。貧富貴賤の別るゝ。長ゝ若弱の序るゝ。四時を去ゝ昼夜を去ゝ。喜怒哀楽の情慾るゝ是ゝ。その一ゝを万葉の天子ゝも免ゝ
ろゝ。彼ゝ死を楽むりの真の楽ゝよゝ。哀死と哀むりのも亦真の哀ゝよゝ。至仁の親るゝ至悲ハ涙ゝ。苟聖王の制度ゝ。ゝろゝ礼をりて節ゝとゝ。てゝ人ゝる情を養て天然ゝ固らゝ。夏ハ冷れゝとも。その節ゝ去ろゝとゝ衣ゝを更秋ハ暑け是ゝ。その節ゝ去ろゝとゝ衣ゝを
襲喪ゝ居の哀ゝも。母子果ろゝとゝ。ゝろゝあゝね笑顔をつゝろゝつゝ。ゝよゝとゝまりの酒ゝ宴の楽ゝも。法則を乱さんゝとゝ。意ゝもゝあゝね慮辞ゝく。

盃をもさめさゝ天子の親さもうちそゝび夫婦の睦ゝ絃。ゝろそゝび礼節の拘束ゝ繋ゝとゝ。仁義の餓鬼とるりの人間のゝゝて死ゝれゝがくる
何責ろ。ゝろ是ゝべつ是ゝ又今さゝふ。何ゝろ回番仕ゝぐさゝゝねいゝまされどのゝざるとゝ死ハ誰ろ永ゝこのうゝをとゝろるべさゝと。そひそゝど慰ゝ假ゝ形
とおゝゝ仕ゝくゝろるゝ先生ハいまゝ死後の楽ゝともゝべ又ゝこの國の風俗ゝ
ゝりのハゝど。ゝろゝ惑ひゝく化ゝを笑へゝべ人さゝれゝを笑へゝそゝ。仕ゝくゝ
南荒の陬ゝ人ゝを食ゝ國もゝり。西天の中ゝハ教生ゼざる國もゝり北狄ハ物のゝあゝ是ゝをゝゝべ東海ハ君子ゝ富ハ況て日本の武烈支那の尭王の人
を屠ゝく楽ゝとゝのひゝる。衛霊公の隣ゝを車ゝ乗ゼ醍醐院の愛ゝ
位ゝを捨ゝりくゝるゝんど例ゝ支ゝろゝ王ゝとも覚えゝざれゝばゝやゝゝくゝの賢者ハ
堵ゝ入ゝるゝと元國の大禁ゝを冒ゝとゝりゝゝろれゝばゝろゝ國俗の哀む所ゝそゝ

とするもの。おもむきとおかゝびたるうたとするれハ化國の人いこゑとをゝく。
只の哭こゑとゝゝめ玉ど。その哭中ゟ樂をあり。喩てゝゞが文藩人の生平ふ
悲言ハゞかごて。哀しいだうで哭あゝゝびゝ物ゟ感じて哭ハ人情物ゟ
ぬとそ哭ハ情慾。哀しいとを嬉びるハこの國ゟのゝ限ゝんや。或ハを考ゑん
との。途ゟ病卧て今臨終ともぎれ或ハ水没或ハ絞経枉死のりの。道次
ふ作ゟ。とれハ蛾のごく裹ひ蝿の如く焼ゟ。ゟとを訝ゟりの路ゟりあゝ
ゟゝんごも真実ふこれを憐ゝゝく某ゟと。臨終の正念をゝゝめとゝ。りの
ハゟりく。訝ゟりのゟゟゟく多くゝゝいよ〳〵死ゟるりのゟ益ゟ。丈夫逐ゟるゟる。
逝者ハ水の如く。貴賤老女ゟゞくの浦ゟ。何日何時のゝれ死ゟ没ゟもゝれ
ぬ淫業ありるゞら。化の枉死ゟ驚ゟゞ真実憐む彩るく。ゟを目の得
とゞゝもゟゟさゟゝゟゞふ戯気くも鬼ゝゝ化物ハこの國ゟ絵ゝゞゟゞら。

これらハ人の哀をを身の年ゟふるふゟゞゞや。又かくまでゟ作ゟゞゝも。
凝情ハをゞて哀化を楽ゝとゟる右ゟ式大夫曲のあゟまるる。笑ふも
泣ゝえゞ胸苦ゝとゝ。鼻涙うらゝをて嬉ゟゞ。物の本のあゟまるる孝
子節婦のうくを倣りて理ゟ迫ゟれ徐下ゟハ。ほゟゝと泣ぬりのもゟ。
その哀をを飲ゞあゟまるゟ本ゟハ見料ゟとハゞ哀ををゟゝく哀む
ハゟれゟ哀をまるゟ作ゟ化。彼ゞ哀ゟ誘引ゟ感じて情の動くのゝ人ハ
天地の陶器ゟく。假ゟ人の形をるゞら。陶器ゟ原来声ハるけゟど。叩ゞが
玲瓏ゟるゞて。人の性も又もゟん。靜ゟるが天性ゟ玉ゞと物ゟ叩ゟて。情慾
のゝ高を数ゝ。喜びもゟ玉怒ゟもゟ玉哀もすれ。楽ゟもすれど人の性ゟ
七情のゟゞと茶。碗ゟ音のゟゞが如ゝそをゟゞとゟて可ゟるらゝや。又ゟりとて
可ゟるんや。ゟゝ金石陶器ゟ声ゟゟとのゟゞとゞハゟゟ杵ゟ又声ゟる。声ゟく

て戸を発る。是則物類相感玄玅深微の至こゝろ」とを論じがたし。辨ずる」とも解ず」人の性ふ七情あり」ど感ずる随ふ七情あり。その理又悟べし。馬を指て馬もうのく。琴を数て後ふ琴を」かゝべる八驚跡件くの摠名ふそ琴八龍脣鳳足ふ件くの摠名あり。ゆ」これ髣髴ごとく回毛ごとく斉榮と伴ふよとうよれ八馬と名づくべきりのゆ」ごとく龍脣ごとく鳳足ごとく雲衣ごとく蟠紋とうとうよれ八琴と名るりのゆえ」喜怒哀懼愛悪慾とうみてえ」ど人の情とをべきりの」。もうとうよれ八馬ふ馬の具足ふ」ど馬とゆる。琴ふ琴」。調ふ」ど琴」ごゆる金石声ゆ」。叩」ど声あり。人ふ七情」感ず」ど情発る。物ふ有ずをゆるうとう」。有八是人情ずふ天性有ずとうよくく道ふ入ごとく感じて動るりのゆ」。殊ふ女子八胸映くゆゆ」。裏ふ迫るゆうふ飲」のふも哀」のふも。一倍涙りうれど。真ふ哀む」ふ八鮮し。これ前ふもいへごとく。哀」のエごうの」。あふ三の切ふそく武太夫曲ふあり」ど」ふ八物ふ誘ふ」ど泣ふ涙ふ袖を絞ふ」ど」ふ有ふあうで。却保養ふうゆのうりこれようて」ど」ふの」哀傷郷ふそ男ごふ八三の切説て泣ふごく。吝嗇人の悲言ようゆ。何ひとつ身ひのうへとまく有ふあうて保養」とうゆあん。男ごもや鰥人の涙八殊とうよふ哀傷郷の人の涙八玉ふも金ふもの。ら彩ごも泣」保難ふ浮世の憂ひ忘ゆ妙某ふて亦金銭ふ代ゆ」。世ふ彼三の切を泣ふ。あ」ど。感ごれど猶ゆ」ふりて正ごと見ふ。刈萱の山の段阿波の鳴戸の順礼場ごうの哀」いごあ八

あいの子ふ

ばかりぞ。そもそも彼泡十郎兵衛といふものが。忠義の為ぞと云て。盗賊となり。非義非道の行ひをなし。その天罰の後よその子を脱ぎぞ。つゞが女児とも云ふべきに。金の為に教を自業自得。女児ハ可愛王の子と。我の因果が子に報ふと云ふ出る積りであらうね。設へ。めも口がよすぎの言ふ。盗賊杜騙とゐう果しも。國次の刀。貪浅の為。重い忠義ふるん。命捨るかさらく。獣ぬとハおさの女の鬼の先主の為ぞれぞく。盗賊しと。忠義とゐい言語同断。夫婦が仇一つ討く。盗賊の悪名とそられ。古主の面へ泥を塗る。不忠の至り。不義の至り。苦しい工夫をとゐへ。虚も涙ハこゝぞ。ねど人情ハ理をよろ。孫也ぬる而のあれさふらぶを涙ハこらでおらんとよい程よ推おそが。浄瑠璃作者もさるものゝ。り理を推て論ぶると。ハ慾情ふ逐ゝの不図盗をするも

めくんが。忠義ふ凝る丈夫がさつまろとおもふ。ハゝゝ。ハゝゝ。そこいとて盗ぶのらふや。又婆こどのも婆こどの。十ふんるやるね孫女児ふ親の在所を索ゐよとて。大枝の倉をりこもそ。獨行をさうるハ石を抱うせそ。測ふ臨ず。薪を負て火ふめるれと。教ふる異るべ。ハゝゝ。狂ふ報さ是ぞとも。胡麻の蝿ふ追つけ。れるのが助りがた命る。彼婆こぞのまゝこのるさと。十郎兵衛が悪行よりハ比丘ハ女児が枉死も。苦しいとゐのを。一幕涙ぞもふ及べど。亦彼加孫重氏人通り。萱とのも不了簡。名告あても大ふるゐよ。名告ぞ物をゐせて石堂丸よ住せう。又見物ふも袖彼くる。そのこのうめく。質屋庫とゐ草紙へ。こゐう我られバてゐへいぞ。彼戯ぶく泣りのへ。ゑよ戯ぶ鬼が。ぞく。実情ふゐねゐこの除名とる三の切も大々ぶ推てもり。通理ふ稱ひ理ふゐめくる

あつまる脚をとゞめ。その数尋くるにいとまなし。ゆゑに世俗ろ。耳に遠くて解ぐ。ふたゝび三たび尋思して。その理をたゞつさ。そゞめて感ずるまでなり。周前を顧ず。上さる艶曲歌舞あり。近遠くて聞ふあらざるところなくあはれぐせ。吁と感じて泣のるのを三の切とく改ぎ。世の人情かくらし。それが親を喪て涙こぼさぬものゝるけもと年を経るや。情慾の忙しきに紛れ忘る。向徒もあるからん。生涯親を慕ふの。こゝを稱して孝子とふ至孝ハ孝るく。誠忠が忠る。孝るくして孝をつくし忠るくしてたゞるのふこゝを名づけて聖とふかれば強て考るだん。元年ふるさ粧ふ。ふ窮窟さを強て忠をつくさんとて。子を棄妻を賣りのいとる名聞の為なるべし至孝誠忠とふいふ。況て盗賊杜騙しても忠義とふ論あるべし。彼沙石集ふ載る法師が母の為ふ禁断所あて漁ビーとふ。仰て非ふる考行とて。孟宗王祥が殺計へへふ。孝行を揚さんとて。勉てなるのふあるべし。孔の意さ情ふべ。身の宝とふりのへ親ろ外ふ。ふとゞ誠と人稱して考行りのとふ方ふ。又もゞ元て考をまる。こゝが真の考行るのふ。ろて推と死へ犬のよ怒ろ役ろりのへ。ゞ怒ぬとも威勢あり。酷しく歎哭りのへ涙流ゞて悲をふし。ふるる草紙物語へふゝゞやの悲しのと書ぬが餘情ふるさ。それが素夫の江上戸弥生九月の沾ろへ雨三滴後ら世ね奴婢の死へ則離別の情ふそ梅若の涙雨。所が涙の雨ふ如ぐ。ゞし唐山ふ丙姫とふ美人あり。えゞの胥門へゆくと死へ涙襟を沾ぐ。ころ死べく悲しが。遂ふ哥王ふ召て罷せられ。王と笹林を共ふ。食ふ山海の珠味をつ稀。富貴その身ふあるしべ。その哭ろ役後悔ろこれと

厲姫 又麗之姫ふ作る芝刻人の子也

雍門子、高誘カ云。日本ノ曲子ナルヘシ。雍門ニテ名ヲ聞キ、琴ヲ又善ク哭ス。雍門ハ齊西門也。居近之因以為氏。見猶歌也。孟嘗君齊ノ相田文、薛ニ封ゼラレ、雍門ヲ過ル。雍門子ト云泰青之誤歟。

劉慎、孝徳

日本書紀ニ、劉慎、武ク、性粗幸ニシテ世謀ヲ解ク。

唐書ニ、侯衛人

高誘カ云ヘル日本の曲子ナルヘシ。雍門ニテ名ヲ聞キ、琴ヲ又善ク哭ス。雍門ハ齊西門也。居近之因以為氏。見猶歌也。孟嘗君齊ノ相田文、薛ニ封ゼラレ、雍門ヲ過ル。雍門子ト云泰青之誤歟。

劉慎、孝徳

日本書紀ニ、劉慎、武ク、性粗幸ニシテ世謀ヲ解ク。

唐書ニ、侯衛人

へいとくがたろれが羊志が貴妃が哭くに傷ふ仰されとも。その俟そ亡妻をそ減ろ出るのう。俳優人の愁歎場や上ふ入は愛ふ身を今まて。我を忘まてく哀む者ふ又見物も彼ぞし。まもその愁歎ふ真の哀くあらばとのくとも。憶をようる不あくんその哀くを飲びりの。世間りくくの孟嘗君又いだくの世祖おうんさと先生嘆よさく。ろが風俗ろ哭をのようねとそ誠めの人情よ賺さ惑ひふ彷ぐ。君彼摔子ろ。啼声を笑ものへぎや。終月舉て。嗌べどの。嗄まど。声まのづうら出ふ任て。弔怒哀樂ふ困ふおうねが注とのくとも和ぎあり。擒山四鳥の鳴よ比へ。淫婦がつりの哭声をろりあひ。孔子のいおくへをろねざる先生あおくざるべさふ。ろが風俗の物ふ哭と摔児の嘆るが如くと笑そうのへねへいふぞや。凡哀傷郷の人そそ。物ぢふ涙りろく。祝べき席ふそも哀き飲べきおも哀むと。化風よ友ろ風俗るまどの。毎日そ常を親。ぢるあ。悪ろの況なさば。爭ひ甘ど利をろひど。慾よ惑へど。ろるふ化風人の情慾を恣ふてそろふ手が紋やら。天と恨そ人を弥め。いだくの罪を造まど。物を憐むふそく。怒をろ世へあろう。あまど。拐手の大懲言。息ひさそろよそ終よ悟よべ。ごまのくよろおろまべ。哀傷郷かたろふかろされり。されが勧善懲悪の為ふ物の本を作りの。理ふ依り。因果ぢ説さ。物のおろまを喩せべそ。おろ云ろのりのよでも。その本然の善ふおくし。ごまをえてろ。ろが態を此ふ恥るりのもあく。まろべ勧善懲悪の。捷径とりのふ哀傷郷ふぞあろう。先生有弥鋭のどいのまど有。学憑を脱まど。治く乱る代。危まざれが危うべ。梨そ苦さを。忘まざれが苦まべ。歓うそ哀さを。

忘れざれば哀しみ」がるなよ。有用をまもり常用あり。もろもろ人の貌
さるるの。酔ふてあひとつぐ。その子ども「父くかる」まば吐血半中
喘ぐて頻滅ぎんとするをみよ。おどろき悲みて周章ふ又一家の士
たるりの。常ふ食ふ紙ふく。妻子の「ふ」を飲ぐび病とれふ食をれ
べ。硫をうくてふと飲ぶ。病漫て菜を求め。哀ふ乞ふてそぐめて哭き。
飢て後ふ食を借ふ。渇て後ふ大ふ飲ふ。熟て後ふ水を投寒て後ふ火を
与ふ「ふ」べ。苦む亦除きざるべうの者ハ死ふて。その益ふ。「ふ」所謂有用の
用ふ。抑亦遅ふべや。よふく動行ふもの。現つけられて多ふ恥
兵衛ハ席ふ堪ぎ忙ふく。栄の戸を逃出て。足ふ信ふて二三町。走ふ退
つ。えふく「ふ」べおうつ室ハ忽地うせく。天そのぐと明るふ。ふ悔ふべ臥
を呼ぶ。そんかふえふべ浅ふや。たぐひ憩ひ尾充が下の。触髏の泡と
ア。ふついぬふろ。これふと怪ふむおふもお「ふ」。紙老賠ふろふ降り来
つ。津ふ舟ふこふろふれふく。そのち葉ふハ冏ふと外て虚空へへふる。

○總評

魚ふ網ふをおそれざる人をおそれ人ハもの「ふ」を哀まざるべ物を哀
む。網ハ魚ふあるりのるべ。故ふ魚ふ「ふ」をおそれざ。物ハ已を「ふ」を
哀む人ハ「ふ」を哀む。人ふあるる。魚ハ高ふる紙ふく。釜中ふ捉べ。
人ハ傘のそるる死をおりハで六慾の街ふ捉べ。物を哀むハもの「ふ」
をかなしふよろべ。已を哀むハ哀を忘るふもろべ。り物
を哀むとさハ。何國ふ是哀傷郷ふるざるりふく已を哀むこれ
ハ誰ふ是ふ想兵衛るべざるりふく哀を忘るりのハ喜怒も
るく。好憎ふ既ふ棄怒るく。好憎ふけ「ふ」べ。哀傷と名ふ冏ふ。

哀傷といふ國ゐけるに、夢想兵衛もまた、酔ふるの、馬轎より墮ちふしてその痛をおぼえさせ、その疼痛をまぬがるゝ為、又その命を聞かに至りて、我醒てこの書を批評、その酔ひ醒めんとす。

みなさんがよびやうの有りまするまで。

夢想兵衛胡蝶物語後編巻之三畢